

西部戦線での統合・諸兵科協同作戦（1918年）¹

デイヴィッド・ステューヴンソン

1918年の西部戦線では、2つの顕著な展開がみられた。1つは、連合軍とアメリカ軍がドイツに対して優位を得たことだが、もう1つは、3年に及ぶ軍事的膠着状態が終わりを告げ、相対的な機動性が再び高まったことである。この変化には連合軍側とドイツ側が共に寄与しており、イギリスの歴史学者ジョナサン・ベイリーはこれを「近代戦の誕生」と表現している²。ベイリーは、歩兵、砲兵、航空機、装甲車間の協同のための新たな技法が導入され始めた1914年から1918年間の軍事革命は、1940年の電撃戦（ブリッツクリーク）から1991年の砂漠の嵐作戦にいたるまでの、後の作戦の先駆けになったと示唆する。全兵科の協同自体は新しいものではなく、19世紀の軍隊にも歩兵隊、砲兵隊、騎兵隊が含まれていた。しかし西部戦線では、騎兵はほぼ戦場から消え去り、航空偵察と機甲部隊がその伝統的な役割を引き継いだ。砲兵と歩兵は共に特化と差別化が大きく進んだ。

本論では、西部戦線における最後の数カ月間の戦闘の経緯に即してベイリーの主張を考察する。連合軍の勝利の一因は連合（＝同盟国間）作戦を実践したことにあるが、それに加えて連合軍は統合作戦、すなわち軍種間作戦（陸上での陸軍と空軍の協同や、海上での海軍と空軍の協同を伴う）についても、特に諸兵科協同作戦（機甲、砲兵、歩兵、兵站などの地上軍各部門間の協同を伴う）として採用した。こうした新たな形態の諸兵科統合作戦および軍種間協同作戦が連合軍の成功に寄与したと広く認識されている。しかしながら、それだけが成功の理由ではない。本論では、連合軍の成功を全体の脈絡の中で捉えることとしたい。そのために、まず1918年以前の状況を分析し、次に同年3月から7月のドイツ軍の攻勢、最後に7月から11月の連合軍の反撃について分析していくことにする。

I. 1914年～1917年

1914年秋から1917年にかけての西部戦線における際立った特徴は、その不動性である。

¹ 本論文は拙著 *With Our Backs to the Wall: Victory and Defeat in 1918* (London, 2011) に基づいて作成している。また本稿執筆にあたり石津朋之国際紛争史研究室長および村上和彦 1 等空佐からご支援をいただいたことを付記する。

² J. Bailey, *The First World War and the Birth of the Modern Style of Warfare* (Strategic and Combat Studies Institute Occasional Paper No. 22, Camberley, 1996).

1917 年 3 月にドイツ軍が新たな陣地としてとくに構築した「ジークフリート陣地」、すなわち「ヒンデンブルク線」まで戦術的な後退を行ったことを除けば、両軍が前進できた最長距離は約 6 マイル（約 9.6 キロメートル）だった。この膠着状態をもたらした主な軍事的要素は、以下のとおりである。

(i) 有刺鉄線を張り巡らせた塹壕。19 世紀の典型的な野戦防備であった胸壁に代わり、日露戦争やバルカン戦争でもすでに使われていた塹壕が導入された。固定的な防御施設の役割は大きく低下した（ベルダンの戦いは例外）。

(ii) 防御火力。連発銃と機関銃のほか、特に 1890 年代に開発された、1 分につき 20 発の榴散弾や榴弾を発射できる速射野砲。西部戦線の死者数の 60% が砲射撃によるものと推定されている。

(iii) 高い兵力密度。西部戦線はベルギー海岸部からスイス国境まで 450 マイル（約 820 キロメートル）以上にも及んだが、対抗する軍隊はかつてないほど大規模で（1870 年から 71 年の普仏戦争時は数十万だったが、このときは百万単位）、装備する火力も格段に増していた。さらに、死傷者は膨大な数に上ったにもかかわらず、病死の割合は過去の紛争よりはるかに少なく、負傷者の多くは後に現役に復帰している。

(iv) 兵站支援。西部戦線は鉄道が密集して縦横に敷かれた地域に位置し、ドイツ軍も連合軍も前線と平行に走る幹線に依存していた。また、両軍共に終端駅から先の輸送には何十万頭もの馬を用いた。どちらの軍も大量の砲弾が必要ただけでなく、缶詰食品などの革新的技術によって、冬営地に撤退することなく年間を通して戦場に部隊を維持できるようになった。

以上のような要因が重なっていた状況において、新しい技術は効果を発揮できなかった。

(i) ドイツ軍は 1915 年 4 月の第 2 次イーペルの戦いで、またイギリス軍は同年 9 月のルーの戦いで毒ガスを導入したが、その量は少なく、ボンベから放出して（適切な風向きのあるときに）風に運ばせるという方法だった。また、それなりに効果的なガスマスクが程なく開発された。

(ii) 坑道爆破も用いられた。とくに 1917 年 6 月のメシヌの戦いの事例が知られる。しかし、坑道爆破は準備に時間を要し、危険で費用もかかるうえ、1917 年頃には探知も容易になっていた。結局、以後は使用されなくなった。

(iii) 戦車は主にイギリスとフランスで開発され、1916 年 9 月のソンム、1917 年 4 月のアラスとシュマン・デ・ダムに配備されたが、速度が遅いうえ脆弱で、少数しか用いられなかった。

(iv) 航空機は対地攻撃用としてはほとんど価値がなかったが、偵察には重要だった。主と

して効果的だったのは中砲や重砲 (口径 100 ミリ以上) との連携で、中重砲による榴弾 (榴散弾ではない) 射撃は塹壕防御を突破する最善の手段となった。航空機は砲兵隊とは無線で通信できたが、歩兵隊とはできないのが普通だった。しかし、重砲は野砲に比べて大量生産が難しく、要員の訓練にも時間がかかった。少なくとも 1916 年までは重砲の数は少なく、弾薬も概して質が悪かった。敵陣の最前線は破壊できたものの、縦深に配置された防御を突破することはできなかった。

西部戦線は 1915 年から 17 年まで固定したままだった。攻撃部隊が単に同じ過ちを繰り返し続けたとの見方をされがちだが、戦術的な手順が新しい状況に適応できなかったと考えるのは間違いだろう。むしろ、連合作戦の協調が改善される方向に進化しているのがみて取れる。西部戦線の英仏軍は 1915 年 9 月と 1917 年 4 月に連続攻勢を試み、これが事前の打撃となって、別の区域での主攻撃開始前にドイツ軍予備隊を撤退させることになった。1915 年 12 月と 1916 年 11 月に行われたシャンティイでの会議で連合軍はさらに意欲的な計画を採択し、それぞれ 1916 年夏と 1917 年春に同時攻勢を仕掛けることにした。1916 年夏の一連の攻撃 (6 月のロシア軍による「ブルシーロフ攻勢」、7 月の英仏軍によるソンム攻勢、8 月のルーマニアの連合軍への参加、同月のイタリア軍のゴリツィア攻略) は中央同盟国にとって大きな圧力となり、連合軍は翌年春にも一層強力な同時攻撃を行うことに合意したが、1917 年 3 月のロシア革命でこの計画は破綻する。1917 年夏にはイギリスがイーペルの突出部からの内陸進軍と、オーステンデとゼーブルュッへの港 (ドイツ軍が駆逐艦・潜水艦基地として使用していた) を奪取するためのフランドル沿岸への大掛かりな水陸両用上陸作戦を同時に行うことを計画したが、この計画は第一段階より先に進むことなく終わった。

さらに戦術レベルでも、連合軍は全兵科協同での作戦実施能力を高めつつあった。航空偵察と写真撮影のより高度な技術を開発し、光学標定と音源標定により敵砲の位置を特定できるようになった。最初にフランス、次にイギリスが「移動弾幕射撃」の実験を行った。これは攻撃に向かう歩兵の間近なところに野戦砲射撃による保護弾幕をかける手法で、正確なタイミングで行えば、防御側が身を隠している間に攻撃側が敵の目前まで迫れるというものである。

しかし、ドイツ軍 (西部戦線では概して守勢にあった) もその間に、とくに 1916 年 8 月にパウル・フォン・ヒンデンブルクとエーリヒ・ルーデンドルフがドイツ陸軍最高司令部 (*Oberste Heeresleitung*: OHL) のトップに就任して以降、防御戦用の新たな対抗手段を発展させていた。たとえば、塹壕はそれまで以上に精巧に構築されるようになり、1917 年には、各々が 3 本の主塹壕線と連絡壕からなり、さらに深い待避壕も備えた 5 連続構

成の防御システムが構築されるようになっていた。あるいは、連続する塹壕線に代わって、相互支援が可能でカムフラージュを施したコンクリート製防御陣地が採用されたところもある。それに加えて、ドイツ軍は（最も脆弱だった）最前線に集中させる部隊数を少なくし、その部隊を迅速な反撃に備えて後方で待機させた。また、砲兵隊はさらに後方に配置され、大部分が敵の砲撃を生き延びた。こうした手法は、1917年4月のフランス軍によるシュマン・デ・ダム攻勢や、同8月のイギリス軍の第3次イーペル攻勢の際に効果的に機能した。より普遍性のある言い方をすれば、ドイツ陸軍には経験から体系的かつ自己批判的に学習し、ドクトリンの変更をいとわないという確たる伝統があった。彼らは新たな防御戦術だけでなく、新たな攻撃戦術も開発していた。特に挙げられるのはブルッフミュラー砲撃システムと歩兵の「突撃隊」戦術だが、これらについては次節で詳述する。これらの手法は1916年のベルダンの戦いから、ガリシア（1917年7月）、リガ（1917年9月）、カポレット（1917年10月）での作戦を通じて発展してきたことがわかる。1917年11月のカンブレールの戦いには、これらの新たな戦術が集約されている。イギリス軍の第一撃では戦車476両が投入され、砲撃と航空攻撃による奇襲を仕掛けた後に、歩兵隊がドイツ軍戦列を突破した。しかしその2週間後、ドイツ軍が特殊攻撃部隊による反撃で奇襲を行って成功し、失った陣地の大部分を奪回した。この段階では、2つの新システムが多かれ少なかれ互いを打ち消し合っていたようである。

II. 1918年3月～7月

1918年の3月から7月までの間に、ドイツ軍は西部戦線で以下の5回の大規模攻撃を行った（一般に「ルーデンドルフ攻勢」と呼ばれる）。

ソムム攻勢（コード名「ミヒヤエル」）：3月21日～4月5日

リス攻勢（コード名「ゲオルゲッテ」）：4月9日～29日

エーヌ攻勢（コード名「ブリュッヒャー＝ヨルク」）：5月27日～6月4日

マーツ攻勢（コード名「グナイゼナウ」）：6月9日～12日

シャンパーニュ＝マルヌ攻勢（コード名「フリーデンスシュトゥルム」）：7月15日～18日

時とともに前進距離は短くなり、戦果も少なくなっていくものの、初めの3回の攻勢では最大80キロ進軍し、アミアンとアーズブルックの主要な鉄道路線の分岐点とパリへの進入路を脅かした。これだけの規模の動きがみられたのは、1914年以来のことだった。つまり1918年には、両軍がそれまでの膠着状態を打破する手段を見出したのである。

また、手法の細部は異なるものの、両軍とも諸兵科協同作戦をある程度用いるようになっていた。

ドイツ軍の成功の理由は次の2点にある³。

(i) 砲撃：ブルッフミュラー＝ブルコウスキー・システム。重要な点の一つは、奇襲が部分的に復活したことだった。ドイツ軍は3月21日にイギリス軍陣営の南部で、4月9日にポルトガル軍に対して、5月27日にはフランス軍に対して奇襲を成功させた。「ブルコウスキー法」を使うことにより、戦線の後方で試験発射を行って各砲の特性をテストし、「試射」（射程距離を定めるための射撃）を必要とせずに標的に照準を定めることができた。1918年攻勢で砲兵指揮官を務めるため東部戦線から西部戦線に異動してきたゲオルク・ブルッフミュラー大佐は、砲をできるだけ前方に配置し、集中制御された射撃計画に基づく単一指揮下に置くのが有効と考えていた。砲はできる限り敵の目から隠し（夜間に前線に移動させるなど）、1916年から17年にかけて連合軍が終日砲撃を行った時のように、数時間で大量の砲弾を発射しようというのである。ただし、そのねらいは敵軍を壊滅させることではなく、敵の防御を「無力化」することにあった。したがって、標的（航空偵察と捕虜の報告をもとに特定し、そこに対して連続的に射撃する）は、まず敵の指揮統制システム、次に砲兵隊（主に毒ガス弾で沈黙させる）⁴、最後に前線防御となる。歩兵が前進を始めたなら、その前方を「フォイヤーヴァルツェ (*Feuerwalze*)」（連合軍の移動弾幕射撃と同様の手法）で掩護する作戦だったが、実際には弾幕の前方移動が早すぎるが多かった。

(ii) 浸透戦術：ドイツ軍の歩兵ドクトリンは複数の起草者によって立案されたが、この新方式を代表するのは、OHLに承認された「陣地戦における攻撃」に関する指針を立案したヘルマン・ガイヤーである。この指針によれば、攻撃は波状にではなく小隊規模の特技兵

³ ドイツ軍の戦術については以下を参照。T. T. Lufper, *The Dynamics of Doctrine: the Changes in German Tactical Doctrine during the First World War* (Fort Leavenworth paper, Fort Leavenworth, Kan., 1981); B. I. Gudmundsson, *Stormtroop Tactics; Innovation in the German Army, 1914-1918* (Westport, Conn./London, 1989); J. Duppler and G. P. Groβ, (eds), *Kriegsende 1918: Ereignis, Wirkung, Nachwirkung* (Munich, 1994); D. T. Zabecki, *Steel Wind: Colonel Georg Bruchmüller and the Birth of Modern Artillery* (Westport, Conn., 1994); D. T. Zabecki, *The German 1918 Offensives: a Case Study in the Operational Level of War* (New York/London, 2006).

⁴ 1918年には毒ガスは主にボンベからではなく砲弾で発射されるようになり、1915年の時点より使用量も種類もはるかに増えていた。攻撃には主としてホスゲン、防御にはマスタードガスが用いられた。イギリス軍には毒ガス専門部隊があり、事実上警告を発することなくガスボンベを発射できるリーベンス投射器（軽迫撃砲の一種）を使用した。おおむね以下を参照。L. F. Haber, *The Poisonous Cloud: Chemical Warfare in the First World War* (Oxford, 1986); O. Lepick, *La Grande Guerre chimique: 1914-1918* (Paris, 1998); A. Palazzo, *Seeking Victory on the Western Front: the British Army and Chemical Warfare in World War I* (Lincoln, Nebr./London, 2000).

部隊が実施する。各兵は小銃擲弾、火炎放射器、携帯式軽機関銃で武装し、弾幕の後方から連合陣地に浸透する。防衛陣地は迂回し、後続部隊に対処を任せる。可能な限り迅速に、かつ間断なく前進しなければならない、とされている。攻勢の開始前に、特に体力のある若い兵士が選抜され、この任務に備えた4週間の特殊訓練を受けた(食事と休養も通常以上に与えられた。また、比較的平穏な区域では、これらの兵士が抜けた後に老兵やロシアから帰還した部隊が配置された)。しかし、この先行部隊は迅速さを確保するため休息も許されず、負傷しない限りひたすら前進を続けることを求められた。これは残酷な手法であったうえ、とりわけこの攻撃波にほとんど支援がないことを考えれば、ドイツ陸軍の精鋭を壊滅させる手法だった。この頃、ドイツ軍はすでに装甲地上攻撃機の特別な派遣隊(地上攻撃飛行中隊)を編成しており、3月と4月に実戦に投入したが、悪天候に妨害された。戦車については、捕獲したイギリス製数両以外は保有していなかった(自国製の試作戦車 A7V はほぼ使いものにならなかった)。輸送用トラックの保有台数は連合国の10分の1でしかなく、軍馬も大幅に不足していた。このため、新戦術は敵の最前線を圧倒するには十分だったが、その進展を数日以上維持するための手段を欠いていたうえ、糧食や砲弾の支給が途絶えたために前進が妨げられる場合もあった。加えて、最初の2度の攻勢で決定的な勝利がもたらされなかった結果、ドイツ軍歩兵隊は疲弊して次第に士気が低下し、準備に注意を欠くようになった。6月9日と7月15日の攻撃についてはフランス軍は事前の警告を得て、反撃態勢を整えていた。

III. 1918年7月～11月

1918年後半は、連合国の前進がほぼ間断なく続いた。局地的な反撃を除けば、ドイツ軍の攻勢は途絶えた。連合国は、この年3月から7月のドイツ軍総攻撃を押しとどめただけでなく、停戦時までには戦線全体で最大100マイル前進していた。ドイツ軍は攻撃によって戦争に勝利することができなかつたばかりか、もはや守備にまわって連合国の前進を制止することもできなかつた。この形勢逆転の一因は、ドイツ軍の弱点にあった。ドイツ軍では、ゴム不足によるガスマスクの質の劣化や燃料不足による航空機への制約といった問題はあったものの、基本的な歩兵用兵器については最後の時点まで十分な備えがあった。それよりも重要な弱点は、兵士数と士気にあった。ドイツは1918年3月にロシアのボリシェヴィキ政府と個別に講和を結んだにもかかわらず、100万人の部隊を東方に維持していた(同年末までには50万人に縮小)。5度のルーデンドルフ攻勢の間に約100万人が死傷し、総数は510万から420万人に減少した。一方の連合国側では、米国がヨーロッパへの部隊派遣を大幅に拡大したため、フランスに駐留するアメリカ軍要員は3月の時点の22万人

から 11 月には 200 万人を超え、数的形勢は連合軍優位に傾いていた。さらに、ドイツ軍は 1917 年からすでに規律上の問題に悩まされていた。春季攻勢で戦争を終結できるとの期待感から一時的に問題は縮小したが、ひとたびこの期待が損なわれると、士気の低下が一気に広がった。8 月以降、西部戦線における連合軍側への投降者数が急激に増え（イギリス軍の推計によれば、この年の投降者総数は 35 万 9,000 人）、さらにそれ以上の数が戦線後方で逃亡したり、帰郷休暇から戻ってこなかったりした。要するに、ドイツ軍はもはや以前のような強大な敵ではなくなっていたのである。

ドイツ軍の弱点のおかげで、連合軍は自軍の強みを活用することが可能になった。その 1 つは、連合作戦能力を向上させていたことである。1917 年 11 月、連合軍は各国政府首脳から構成される最高戦争評議会（米国はオブザーバー）を設置して（月 1 回の）定期会合を開くことにし、その統同計画部をベルサイユに置いた。さらに重要なのは、1918 年 3 月から 4 月にフェルディナン・フォッシュが連合軍西部・イタリア戦線総司令官に任命されたことである。最初は調整役としてであったが、やがて指揮官の任務を与えられた。フォッシュは英仏米の戦力予備の配置権限を持っており、守勢にあった 7 月前はこの権限を慎重に行使した。その後、連合軍の攻勢に向けた戦略の立案を主導した。まず 7 月から 8 月の比較的限定的な作戦で連合軍の炭田と鉄道幹線から敵を一掃した後、9 月末の一斉連続攻撃でヒンデンプルク線を突破し、自軍の鉄道幹線を脅かされたドイツ軍は、撤退の加速を余儀なくされた。

連合軍では諸兵科協同も強化されていた。歴史学者の間では、特に大英帝国との関連においてこの展開が少なからず注目されてきたが⁵、近年ではフランスとアメリカに関しても関心が向けられている⁶。まず協同が始まったのは情報活動である。ベルギーとルクセンブルクにいる連合軍情報要員からドイツ軍後方での軍用列車の運行に関する情報が報告され、（信号情報の通信量分析と併せて）参謀部における敵の戦闘序列の再現作業に役立った。捕虜の尋問は、敵の攻撃についての事前情報や敵軍の士気に関する貴重な情報源となった。また、航空写真撮影で敵砲の位置を特定し、これを連合軍の重砲隊がドイツのブルッフ

⁵ R. Prior and T. Wilson, *Command on the Western Front: the Military Career of Sir Henry Rawlinson, 1914-1918* (Oxford, 1992); T. Travers, *How the War Was Won: Command and Technology in the British Army on the Western Front, 1917-1918* (London/New York, 1992); P. Griffith, *Battle Tactics on the Western Front: the British Army's Art of Attack, 1916-1918* (New Haven, Conn./London, 1994); P. Griffith (ed), *British Fighting Methods in the Great War* (London/Portland, Ore., 1996); G. D. Sheffield, *Forgotten Victory. The First World War: Myths and Realities* (London, 2001); S. Schreiber, *Shock Army of the British Empire: the Canadian Corps in the Last 100 Days of the Great War* (St. Catharines, Ont., 2004).

⁶ M. Goya, *La Chair et l'acier: l'invention de la guerre moderne, (1914-1918)* (Paris, 2004); M. E. Grotelueschen, *The AEF Way of War: the American Army and Combat in World War I* (Cambridge, 2007).

ミューラーと同様の手法で、奇襲やガス弾も用いて沈黙させた⁷。ただし、連合軍の重砲はドイツ軍ほど一元的な運用がなされてはいなかったが、数が圧倒的に多く、単一の「攻城砲列」として区域間を移動させることはなかったため、その必要はなかった。その代わりに、複数の地点で次々と連続して攻撃を開始したり、持続的な攻撃を同時に行うことが可能だった。しかし、攻撃開始後には連合軍もドイツ軍と同様に先行歩兵部隊を掩護するために野砲の弾幕射撃を行い、また 1918 年の時点では、英仏ともに歩兵部隊は波状攻撃ではなく、小人数単位での前進を行うようになっていた。また、戦況監視の主な手段は依然として航空偵察だったが、前線部隊が後方の砲兵隊と無線で連絡をとることも可能になりつつあった。

正確な情報による支援を受け、榴弾とガス弾を併用した重砲隊は重要な兵器体系となり、連合軍の歩兵部隊はその掩護を受けてドイツ軍陣地を次々と蹂躪していった。イギリス軍は 1917 年から 18 年にラインラントへの戦略爆撃を試みた（ドイツ軍のロンドンへの戦略爆撃と同様）が、英仏空軍の大部分は、陸軍と密接に協力して地上部隊上空の制空権をとることを任務とした。航空機はそれまで以上に直接地上支援の目的で用いられるようになった。ただし、その有効性はまだ限定的で、たとえば 8 月 8 日のアミアンの戦いの後、イギリス空軍はソンム川にかかる橋の爆撃によるドイツ軍の退路遮断を試みたが失敗している⁸。また、夜間に攻撃開始点まで移動する戦車のエンジン音をかき消す目的で上空飛行も行われた。1918 年には戦車の投入数も以前より増えていたが、その有効性については現在もなお議論があり、概して有用ではあるが補助的な役割にとどまっていた。イギリスのマーク V 重戦車は 1916 年型マーク I よりはるかに優れており、またフランスはルノー軽戦車を何百両も製造し、アメリカ軍にも供給していた。しかし、ルノー軽戦車でも戦場条件下での走行速度はせいぜい時速 5 マイル（約 8km）で、マーク V はそれよりさらに遅かった。第一次世界大戦期の戦車はあまりにも砲撃に弱かったため、(J・F・C・フラー大佐など理論家が構想したような) 敵軍後方を単独で走行する「陸上船」としては使えず、主な役割は歩兵の支援だった（ただし、逆に歩兵部隊の手で敵砲から守ってもらう必要はあったが）。慎重に用いれば、歩兵の死傷者を減らすことができ、準備砲撃の必要をなくすことによって奇襲を支援することができた。第 2 次マルヌ会戦における 7 月 18 日の反撃と 8 月 8 日のアミアンの戦いでは戦車が大量投入された（後者では 453 両）が、これらは変則的な

⁷ 情報活動については、特に次を参照。J. Beach, *Haig's Intelligence; GHQ and the German Army, 1916-1918* (Cambridge, 2013).

⁸ 空軍力については、次の文献に書名が示唆する以上に広範な記述がある。J. F. Wise, *Civilian Airmen and the First World War; the Official History of the Royal Canadian Air Force, Vol. I* (Toronto, 1980). また、次も参照。P. Lissarague, *A History of French Military Aviation* (transl., Washington DC, 1986).

措置で、連合軍の戦術においては、戦車は依然として臨時的な手段であった⁹。たとえば、9月29日のヒンデンブルク線攻撃では、イギリス軍は主として、3日間で75万発という初期砲撃に依存した。ヒンデンブルク線のような精巧な陣地に対しては、戦車はほとんど有用性がなかったのである。ただしこの時、イギリス軍は一種の水陸両用作戦を実施しており、敵の防御陣地の中心にある幅100フィートのサン・カンタン運河を、折りたたみ式ボートと安全ベルト、攻城はしごを使って通常歩兵の手で確保した。1915年から17年は概して丘陵地に苦しめられた連合軍だが、戦車にとっては水路や運河が障害物になったこともあり、1918年にはこうした水路系がたびたび戦闘の中心地となった。

連合国の凄まじい砲撃の背後には、臨機応変な兵站システムがあった。1918年の時点で、ドイツ軍はまだ主に鉄道と馬で移動していたが、鉄道は負担過剰な状態で、馬は圧倒的に不足していた。一方の連合国は、フランスの優れた鉄道網の恩恵に浴した。こちらの鉄道にも負荷はかかっていたが、英米からの石炭、要員、車両の投入に助けられていた。加えて、道路輸送の利用がしだいに増え、たとえばフランス軍は3月から7月の防衛戦の間に、事前に備蓄していたアメリカ産石油を活用して、最も必要な区域への要員の緊急輸送を行った。7月から11月の連合国の前進は、たびたび中断はあったものの、第一次世界大戦における基準に照らせば極めて迅速かつ持続的で、11月にはさらに勢いが増した。ドイツ軍が撤退した後に残された鉄道は多くが破壊されたり、爆弾が仕掛けてあったりしたため、ここでも連合国は鉄道の補完として道路輸送を利用した。11月には明らかに供給網に負担がかかっていたが、ドイツ軍と比べればその程度ははるかに軽かった。実際、ドイツ軍最高司令部が先に停戦を要請することを決め、やがて連合国側が出した厳しい休戦条件を受諾したのは、通信麻痺が大きな理由の1つだった¹⁰。

IV. 結論

第一次世界大戦の最終段階については、開戦時の戦争計画の失敗や中期の消耗戦に比べると既存の文献が少ない。この戦争を全体として理解しようとするなら、このバランスを正す必要がある。本論は西部戦線を中心としているが、とりわけ1918年9月のメギッドの戦いでオスマン・トルコ軍に対してイギリス軍にみられるように、他の戦域においても

⁹ 戦車に関するこれと対照的な見解については、次を参照。Travers, *How the War Was Won* and D. J. Childs, *A Peripheral Weapon? The Production and Employment of British Tanks in the First World War* (Westport, Conn./London, 1999).

¹⁰ I. M. Brown, *British Logistics on the Western Front, 1914-1919* (Westport, Conn./London, 1998). この問題については新しい研究が進行中である。

同様の手法が用いられた。ただし、最新の近代兵器の投入量は概して比較的少なかった（たとえば、戦車が用いられたのは西部戦線とパレスチナのみである）。イタリア軍のオーストリアに対する勝利（1918 年 6 月のピアーヴェ川の戦い、同 10 月のヴィットリオ・ヴェネトの戦い）や 9 月の連合軍のブルガリアに対する勝利は、1915 年から 16 年の手法に多くを頼っていたが、敵軍の士気低下にも大いに助けられた面がある。他方、これらのどの戦域においても連合軍側の行動は大西洋や地中海の海上交通路の支配に依存しており、これに関しては U ボートを打倒する苦闘の中で対抗策として別のパターンの連合及び統合作戦が考案された¹¹。英米の海軍は共同で北大西洋船団の運行計画立案と護衛に当たり、英仏伊と日本（巡洋艦と駆逐艦を派遣していた）は地中海で共同作戦を実施した。また、海軍は貨物船の速度別のグループ分けや、U ボートの位置に関する情報の収集（とくに無線通信の傍受による）、危険回避のための船団の航路変更などのため、商船とも協力する必要があった。さらに 1918 年には、少なくともイギリス沿岸水域上空では、航空偵察もその一翼を担うようになった。連合国にとっては、広範囲に所在する植民地や南北アメリカ大陸から輸送されてくる経済的資源や人的資源を利用するために、制海権の確保が不可欠だった。こうした資源のおかげで、部隊単位の軍事的効率の面ではほぼ最後まで上回っていたドイツ軍に対して優位に立つことができたのである。全兵科協同作戦は連合国の勝利において極めて重要な要素ではあったが、だからこそ、さらにより広範な背景に照らして考察する必要がある。

¹¹ 海戦については以下を参照。Stevenson, *With Our Backs to the Wall*, ch. 5; P G. Halpern, *A Naval History of World War I* (London, 1994); J. Terraine, *Business in Great Waters: the U-Boat Wars, 1916-1945* (Ware, 1999).